

第七章

人物伝

仙田半畊（せんだはんこう・一八四九〜一九二〇年）

本名 裁（さい）



3-7-1 仙田半畊

一八四九年 現名古屋市中で生誕
一八七三年 仙田家に婿入り
一八九三年 富成村村長就任（〜九五）
一八九八年 郡会議員（〜〇三）
一九〇四年 全国絵画共進会 一等
一九〇七年 全国南画画会 一等
一九二〇年 没

仙田半畊は、一八四九（嘉永二）年、現在の名古屋市中東区にあった赤塚町味淋屋の高橋家の長男として生まれた。十歳で東春日井郡の定光寺に入るも一八六八（明治元）年に還俗して教員となった。一八七三年、半畊は富成村河北（現大口町河北）に住む仙田善之右エ門の長女いねと結婚し仙田姓となった。半畊が婿入りした仙田家は、大地主で豊かな経済基盤があったため、自身は書画・漢詩を好み骨董を収集し教養を深めていった。

村瀬太乙（一八〇三〜八一年）の薫陶を受け、のち京の秦金石（一八五五〜不詳）に師事して南画を学んだため、半畊は特に漢詩・山水画に堪能であった。一九〇一年、岐阜県絵画共進会に出品して二等賞、一九〇四年の全国絵画共進会及び一九〇七年の全国南画画会に出品して、各々一等褒状を受け帝国絵画協会となった。また、半畊は富成村（現大口町河北・二ツ屋・仲沖・外坪）の村長（一八九三〜九五五年）、郡会議員（一八九八〜一九〇三年）を歴任している。当時の小口村在住の画人、酒井椿溪（一八五一〜一九二一年）と同世代であり共通点も多い。半畊は婿養子ではあるが二人とも庄屋の家系であり、酒井も小口村の村長を務め、郡会議員を半畊のあとに歴任している。

画に対する特徴は、山水画や花鳥図を描くことを得意とした酒井に対し、半畊は山水画を好んで描いた（3-7-2〜7）。書も達者で、一九一五（大正四）年に建てられた小

口城址の石碑は、半畊の書である(3-7-8)。大口町出身で、昭和から平成にかけて活躍した書家の高木大宇は、父・天仙が半畊に書を習っていたこと、天仙が半畊の書を「とにかく字がうまかった」と何度も言っていたことを語っている。

半畊は一九二〇年、七十二歳で生涯を閉じた。

【作品】



3-7-4 春山水図
(紙本 墨画淡彩)
139.5×34cm
1917年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-3 春山水図
(紙本 墨画淡彩)
136×33cm
1915年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-2 秋山水図
(絹本 墨画淡彩)
125×42cm
1912年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-8 小口城址石碑
1915年
裏面の由緒書に「仙田半畊謹書」とある。
(小口城址公園)



3-7-7 溪橋看梅之図
(絹本 墨画淡彩)
24.6×15.3cm
1888年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-5 秋山水図 (絹本 墨画淡彩)
17.3×35.6cm 1886年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-6 菊之図 (絹本 墨画淡彩)
16.7×59.6cm 1888年
(大口町歴史民俗資料館所蔵)

酒井 椿溪（さかい ちんけい・一八五一〜一九二二年）

本名 惟一（ただいち）



3-7-9 酒井椿溪

一八五一年 現大口町下小口で生誕
一八八四年 第二回内国絵画共進会入賞
一八九二年 小口村村長就任（〜九三）
一九〇三年 郡会議員就任（〜〇七）
一九〇六年 大口村村会議員（〜〇九）
一九一〇年 中古美術展 入賞
一九二二年 没

椿溪は、一八五一（嘉永四）年に小口村下組（現大口町下小口）の庄屋、酒井市郎右衛門の長男として生まれた。

地域の指導者となるべく教養を身に付けることが義務付けられ、その教養の中には、風流を解すべく書画を嗜むことも含まれていた。尾張藩最後の御用絵師となった四条派の松吉樵溪（不明〜一八七〇年）、同じく四条派で中京画壇の重鎮と言われた奥村石蘭（一八三四〜九五五年）に学び、のちに川端玉章（一八四二〜一九一三年）にも学んだ。

こうした生い立ちが「画人・酒井椿溪」を生み出した。椿溪は、ことに花鳥図・山水画を得意とし（3-7-10〜12）、いくつもの作品が展覧会に入賞すると、四条派の画人として尾張の画界で名を高めた。

また、自らを「山茶園」と称し、屋敷の一隅に画室を設

け多くの文人・画人を招き、俳句の吟作も努力を重ねた（3-7-13）。

一方、郷土の発展にも力を尽くし、一八七七（明治十）年に地租改正の小口村役員となり、一八九二年には四十二歳で小口村村長を一年間務めた。その後、一

九〇三年には郡会議員、一九〇六年に大口村が誕生すると旧小口村の代表として、大口村第一次村会議員となり、同じ旧小口村下組在住の大口村初代村長・酒井覚郎（一八六一〜一九三四年）を支えた。

こうして酒井は、村長や議員を歴任しながら画人として作品を残し、一九二一年（大正十）年三月に、七十一歳で生涯を閉じた。



3-7-13 画室のあった庭の山茶花（町指定文化財）

【作品】



3-7-11 日吉丸 (絹本)
127×49.7cm (個人蔵)



3-7-10 白藤猿 (絹本)
106×40cm (個人蔵)



3-7-12 襖絵 狸・鯉・子犬 (紙本) 140×63cm (大口町歴史民俗資料館所蔵)

野田 正昇（のだ まさのり・一八七六〜一九四七年）



3-7-14 野田正昇

一八七六年 現大口町大屋敷で生誕
一九〇九年 村会議員初当選
一九一二年 村長就任（一九四六年まで）
一九三三年 県議会議員初当選
一九二八年 県議会議長（一三三）
一九三五年 県議会議長（一三七）
一九四二年 衆議院議員初当選
一九四七年 没

野田正昇（通称・せいしょう）は、一八七六（明治九年）十二月二十一日、丹羽郡大屋敷村（現大口町大屋敷）の野田庄右エ門の長男として生まれた。

幼少より学業は優秀で、早稲田大学に進み法学を修めた。日露戦争では陸軍歩兵少尉として従軍した。

一九〇九年、大口村の村会議員になると、一九一二年には三十七歳で大口村長に就任した。それ以後三十余年村長の要職に就いた。

村長に就任した一九一二年四月には降雹こうひょう、九月には台風により、村内の農家は壊滅的な被害を受けたため、人々の生活と農業を再建することが急務となった。そこで、一九一五（大正四）年、村内の各地に散在していた青年会（後の青年団）をひとつにまとめて、村民生活の秩序回復を図った。

一九一八年には、村の有力者達の手によって銀行・愛知無尽（今の愛知銀行の母体のひとつ）を設立した。一九一九年、村内に電線を敷設すると同時に、若い村民が新しい農業知識や教養を身につけ、農業の再建を目指すため、農業補習学校（第一・第二）を開校した。

第一次世界大戦後の一九二〇年には株式の暴落をきっかけに戦後恐慌が起き、さらに一九二三年に起きた関東大地震で日本経済は大打撃をうける中、同年、愛知県議会議員となり、村長を兼任しつつ、自ら大口村農会の会長となつて農業の更なる発展に努めた。

愛知県議会議長を二度務めた後、アジア・太平洋戦争中の一九四二（昭和十七）年には、第二十一回衆議院議員総選挙（翼賛選挙）で当選し、愛知県議会議員は辞した。戦後の第八十九回議会では、日本進歩党に属していたが、中央政界での活動について詳細は不明である。

一九四六年五月二日、病気を理由に村長辞職願を提出し、翌年六月に七十一歳で死去した。

三四年間の大口村長、その間二〇年間の愛知県議会議員の兼務、そして晩年の衆議院議員と、明治・大正・昭和にわたつての大口村を率いた政治家であった。

県議会における活動

一九二八年七月から一九三一年九月までの三年間、一九三五年十月から一九三七年十月までの二年間の二回にわたり、議長を務めた。最初の議長在任中には、二〇一四（平成二十六）年に国の重要文化財に指定された県庁の庁舎建設計画議案の可決に尽力した。二回目の議長在任中は、県庁舎の建設工事と重なっている。

一九四一年十二月六日には、愛知県議会の重鎮として、議案可決後、緊急動議を提出した。前日の日米交渉決裂を受けて、県民が一致団結して国難を突破する決議案と、この決議をもって国策推進を祈念する旨の電報を総理・陸海軍省、外務省あてに発するよう提案し、満場一致で採択された。

野田正昇の銅像

一九三三年、大口第一尋常高等小学校（現大口南小学校）の校庭に御真影（天皇と皇后の写真）と教育勅語を納めていた奉安殿が建てられた際、有志により野田正昇の銅像が建立された（3-7-15）。

その後、アジア・太平洋戦争中に金属の供出で取りはずされたが、一九五二年十月に大口村公民館に再建され、一

九七八年に新築した現大口町中央公民館に移された（3-7-16・17）。

一九三三年に建てられた銅像は、当時、村長と三期目の県会議員を兼任し、精気に満ちた時期であった。また、一九五二年に再建された銅像と比較すると、どちらも威風堂々とした表現となっている。再建された銅像は、一九五一年に村長となった社本鋭郎しゃもとえつろうが役場庁舎を見守るような位置にするため、以前よりも高い台座に設置した。



3-7-15 大口第一尋常高等小学校
（現大口南小学校）に建てられた銅像 1933年
右：全景
左：銅像のアップ（ポストカード）



3-7-16

右：再建時の銅像（大口中学校敷地内 公民館西側）1952年
 中：現在の銅像（大口町中央公民館駐車場）2022年
 左：銅像アップ



維精維一允執厥中則人心必服治績必舉君曾為縣會議長不備不荷操縱得宜政敵皆稱至公不敢違節制六為村長拮据忘身誠實執務持費力於產業開發與歲育普及全國町村長會表彰其功績為蓋非偶然也鄉黨夙謹歌其德欲聊表謝意且示後昆所嚮乃相議建銅像以傳不朽云爾

鷲津順光選
 岩田雲岳書

これ精これ一、まことにその中を執れ。則ち人心、必ず治績に従い、県會議長に推挙される。不備不荷（自然体で）操縦（人心を掌握）し、公に至り、敢えて違わぬ、政敵も皆たたえる。節制し、村長を忙しく働き身を慎み誠実に執務し、産業開發に力を費やす。年を重ね普及し育む。その功績のため全国町村長表彰受賞は蓋し偶然にあらずなり。郷の仲間、つとに喜びその徳に謝意を表し、かつ後昆（子孫）に示すため、相談し銅像を建てて以て不朽に伝える。

野田正昇翁銅像再建委員会
 大口村村長 社本鋭郎
 昭和廿七年十月吉日再建之

3-7-17 1952年再建時の碑文

社本 鋭郎（しゃもと えつろう・一九〇一〜八二年）



3-7-18 社本 鋭郎

一九〇一年 現大口市堀尾跡で生誕
 一九四七年 村会議員初当選
 一九五一年 村長就任
 一九六二年 町制施行により町長就任
 一九六三年 愛知県議会議員当選（一七五）
 一九七七年 大口市名譽町民
 一九八二年 没

社本 鋭郎は、一九〇一（明治三十四）年三月三十日、丹羽郡太田村（現大口市堀尾跡）に住む社本亀一郎の長男として生まれた。一九一五（大正四）年に大口市第一尋常高等小学校（現大口市南小学校）を卒業すると、家業の精穀業に従事した。

一九四七（昭和二十二）年から大口市議会議員となり、一九四九年に公民館建設委員長に就任すると、建設中、日に何度も建設現場に足を運んだ。また、野田正昇の銅像再建委員長として資金集めに奔走した。その熱意ある仕事ぶりから、周囲より次期村長に請われ、一九五一年から大口市長、一九六二年から町長を務めた（第二編第一章第二節）。三期を終えたところで、家業に専念する心づもりであったが、再び周囲から推されて一九六三年から一九七五年まで県議会議員として町と県の発展のために公務を全う

した。このほか、大口市土地改良区理事長、木津用水土地改良区副理事長及び理事長を歴任した。

一九七五年、文化の興隆又は公共の福祉の増進に功績があり、かつ、町民の尊敬を受ける者の名譽を称えることを目的とした大口市名譽町民条例が制定された。一九七七年に、名譽町民第一号になったのが、社本 鋭郎であった。

一九八二年一月二十日、木津用水事務所・県庁に行き、公務を済ませた後、夕方、突然倒れ八十歳で生涯を遂げた。町葬がおこなわれた。

堀尾史蹟顕彰会

公務以外にも、堀尾金助ほりおきんすけとその母による母子慈愛の物語『裁断橋物語』の普及と堀尾吉晴ほりよしはるの顕彰に情熱を傾け、堀尾史蹟顕彰会の設立と活動にも取り組んだ。

堀尾史蹟顕彰会は、一九六五年、齋藤武夫さいとうたけお（元名古屋市助役・大口市豊田地区出身）・社本らが中心となって設立し、同年、豊田地区内に所在する八剣社境内はつけんじやに「金助とその母」の石碑・銅像を建立した（3-7-19・20）。翌年から、『裁断橋物語』における金助とその母の最期の別れとなった裁断橋（現名古屋市熱田区伝馬地内）が校区内にあ

たる名古屋市立白鳥小学校と大口南小学校との交歓会や、金助桜まつりの実施、機関紙「ほりおだより」の発刊などの活動を精力的におこない、現在まで引き継がれている。

一九七一年、当時の人気小説家であった水上勉みづかみつとむに、『天正戦暦 姥の架け橋―金助とその母―』と題する舞台台本の執筆を依頼し、劇団前進座により、名古屋御園座をはじめ、全国で公演がおこなわれた。

また、金助の父で松江開府の祖である堀尾吉晴の顕彰活動も積み重ねた。毎年、島根県松江市内の松江城二の丸に所在する松江神社の例大祭と、堀尾氏の菩提寺ほくだいじ、円成寺えんじょうで催される堀尾祭に顕彰会から会員が参加し交流を深めてきた。この活動が土台となり、吉晴が松江城と城下町の建設をおこなった一六〇七（慶長十二）年から一六一一年にあわせ、松江市で二〇〇七（平成十九）年から二〇一一年までの五年間にわたって開催した松江開府四〇〇年祭を機に、大口町と松江市の民間交流がさらに活発となり、二〇一五年に大口町と松江市は姉妹都市提携を結んだ。



3-7-20 堀尾氏邸宅跡に建てられた金助とその母の像
(八剱社：大口町堀尾跡)



3-7-19 堀尾氏邸宅跡に建てられた石碑
(八剱社：大口町堀尾跡)

大竹喜久雄（おおたけ きくお・一九二八～二〇一七年）



3-7-21 大竹喜久雄

一九二八年 現大口町河北で生誕
 一九四五年 大口村役場に入庁
 一九五六年 収入役就任
 一九七一年 助役就任
 一九七五年 町長就任（～八三）
 一九八三年 愛知県議会議員（～九九）
 二〇〇二年 名誉町民
 二〇一七年 没

大竹喜久雄は、一九二八（昭和三）年九月十五日、大口村大字河北（現大口町河北）で生まれ、一九四五年に大口村役場に入庁した。社本村長時代に二十代で収入役に就任して以降、要職を四十有余年務めた。

町長に就任した一九七五年は、第一次オイルショックの二年後でインフレが続き、高度経済成長が終焉を迎えた時期であった。町の財政が厳しく財源の確保が難しい時ではあったが、長年の行政経験と時代の先を読む力で住民の生活が豊かになる施策を進め、町の生活基盤の整備に尽力した。ごみ焼却施設の更新、大口西小学校の開校や総合福祉会館（現中央公民館・図書館）・温水プールの完成など、住民の生活が豊かになり、楽しむ時代の到来にあわせた公共施設を充実させた。

大竹町長の特徴ある施策のひとつとして、保育園と小中

学校に冷暖房を完備した事業があげられる。のちに地球温暖化による熱中症対策として、学校では冷房設置が必須となったため、ほかの自治体からの問い合わせが多くあった。一九八三年四月から一九九九（平成十一）年四月までの四期一六年間、愛知県議会議員としても尽力した。また、県議会議員の傍ら、一九八三年に大口町土地改良区の副理事長、一九八七年には理事長に就任し、土地改良事業を推し進め、組合員及び地域住民の協力を得て一九九九年十二月に全面完了した。二〇〇二年、大口町二人目の名誉町民が授与された。二〇一七年一月二十日、九十歳で亡くなった。

名誉町民の受賞の際に

名誉町民受賞の際、大竹喜久雄は「私が町長に就任した年、社本元町長の功績をたたえるために大口町名誉町民条例を制定（一九七五年九月）しました。自分がその栄に浴するのはいかなるものかという思いもあります。ご期待に沿えることばかりではなかったけれども、多くの先輩や町民の皆さんに支えられてきたことに感謝したいです。これからも町の発展を祈り、謙虚な思いで余生を過ごしていきたい。今の思いは無量です」と心境を語った。（『まんが大口町の歴史 近・現代編』二〇〇六年）

渡邊 米次郎

(わたなべ よねじろう・一八七〇〜一九五〇年)

・脩(おさむ・一九〇四〜九八年) 銀行家親子



3-7-22 渡邊 米次郎

- 一八七〇年 現大口町城屋敷で生誕
- 一九一六年 無尽設立に向けて定款策定
- 一九一八年 大正無尽(株)取締役就任
- 一九二七年 (株)愛知無尽代表取締役
- 一九四二年 愛知無尽(株)専務取締役
- 一九四八年 中央無尽退職
- 一九五〇年 没



3-7-23 渡邊 脩

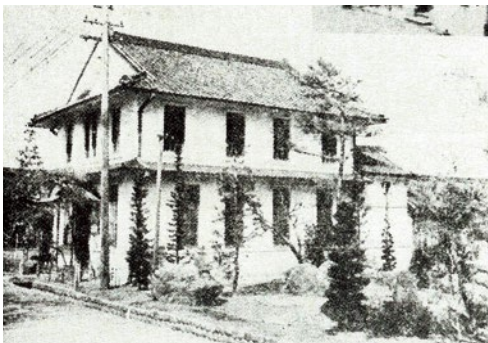
- 一九〇四年 現大口町城屋敷で生誕
- 一九二九年 京都帝国大学卒業
- (株)愛知無尽入社
- 一九六三年 中央相互銀行社長就任
- 一九八三年 同銀行会長就任
- 一九八九年 愛知銀行初代社長就任
- 一九八九年 愛知銀行会長就任
- 一九八八年 没

米次郎は、愛知無尽株式会社の創業者の一人で、後に同社の社長・頭取を務めた脩の父である。

米次郎は、大口村大字小口字城屋敷地内(現大口町城屋敷地内)に住み、織物業を営んでいた。当時の尾張北部では、織物工場とその製品を取り扱う商家が多かったことから、米次郎は経営者の資金需要を支えるため、金融機関としての無尽会社の必要性を説き、同志を募った。そして米

次郎と同じく小口地内に住む七人と、名古屋市内に住む兄の渡邊常太郎もあわせ九人で設立準備を進め、一九一九(大正八)年四月、愛知無尽株式会社が事業を開始した。当初は、取締役五人で代表取締役を置かず、業務は丹羽金重が取り仕切り、米次郎はその経営にあたった。

開業時は、大口村大字小口字田中地内(現大口町上小口三丁目地内)に事務所を置いたが、三年後の一九二二年には手狭となり、大口村大字小口字城屋敷地内(現大口町城屋敷一丁目地内)にあった米次郎所有の土地に仮営業所を作り、好調な経営を背景に一九二七(昭和二)年八月、総二階建ての本店を建てた(3-7-24)。一九二三年に丹羽金重が退任した後、業務の中心となっていた米次郎は、本店の新築を機に一九二七年九月、周囲に推され代表取締役役に就任した。このとき、株式会社愛知無尽と改称した。



3-7-24 1927年に完成した愛知無尽 本店(大口村) (『愛知銀行のあゆみ』)

しかし、戦時下の金融統制の中、県内の無尽会社の合併が進められ、一九四二年には、経営上の目標としていた名古屋無尽と合併し、株式会社愛知無尽は愛知無尽株式会社と再び社名変更した。その際、米次郎は副社長に就任し、大口本店は大口支店となった。さらに、一九四四年に愛知無尽株式会社は、三河を中心に営業していた東海無尽株式会社と、名古屋及び三河の一部で営業していた勸業無尽株式会社と合併し、愛知合同無尽株式会社となり、米次郎は取締役となった。戦後の一九四八年二月、中央無尽株式会社に商号変更を経て、同年五月に米次郎は退任した。家業の織物業を長男にゆずり、自らは三〇年にわたり銀行家として絶えず中心的役割を担った。

小口城址せきじ顕彰碑の建立

米次郎が無尽会社設立とともに、その必要性を熱心に説いていたのが、小口城址の顕彰であった。米次郎が所有する土地の一部が小口城址の範囲内であったことから、石碑を建てて顕彰することを考えていた。一方、愛知県では、大正天皇の即位記念事業として名所旧跡標柱建設事業を計画した。この事業で、建設候補地約三百か所を選定し一九

一六年三月十五日に発表した。村内では、堀尾氏邸宅跡と小口城址が選ばれた。事業の具体的な内容は、市町村長・団体・個人で同年三月二十五日までに標柱建設の願書を出し、翌年十二月末までに完了した工事に対し、金一〇円の県費補助金を助成するというものであった。

米次郎は、同年三月二十三日に県へ碑建設許可申請を提出し、同年三月三十一日に許可が降り着工した。しかし、同じく小口城内に住み、のちに無尽の設置と運営を共にした丹羽金重が、県の提示した碑文案では簡潔すぎて当時の様子を思い浮かべることができず残念だと米次郎に伝えたところ、米次郎も共感した。

そこで、金重の知人で愛知県史編さん委員長であった堀田璋しょうぞう左右（一八七一―一九五八年）らによって小口城址の調査がおこなわれ、同年九月十五日に碑文の増補修正許可申請を改めて提出し、許可を得たため、工事を進めた。石碑は同年十月二十五日建立、十一月三日に建碑式をおこなった（3―7―25）。碑文の揮毫きごうは、河北在住の仙田半畊による。なお、仙田半畊に師事した高木天仙が、小口城址の碑文を手本にした書が残されている。

銀行家として約七〇年を歩んだ脩

渡邊脩は米次郎の二男で、幼くして伯父にあたる渡邊常太郎の養子となり、京都帝国大学で経済学を専攻し、一九二九年三月に卒業した。この年は、未曾有の就職難で、業績が比較的好調であった繊維業においてもほとんど求人がなかった。脩は、実父である米次郎を頼り株式会社愛知無尽に就職した。

最初の一年は大口の本店勤務であったが、名古屋支店で無尽業務に不慣れな職員がいたため、名古屋支店に異動した。当時の株式会社愛知無尽で、取引金額が最も多かったのは名古屋支店で全体の三三・八%、地元の丹羽郡が二二・六%であり、両地域で取引金額の半分以上を占めていた。脩は、得意の経済学の知識を活かしてドル買い・金の解禁と再禁止の意味・金利の動向といった顧客の質問に対し、丁寧に分かりやすく説明した。脩の対応から顧客の信頼が厚く、無尽内でも経済の先行きを見通す力量もあった。

一九四二年の名古屋無尽との合併後には専務に、一九四四年の合併で愛知合同無尽株式会社が誕生した際にも、専務に就任した。戦前から役員として、無尽・銀行を支え続けた。

その後、一九六三年に中央相互銀行の社長に就任して以降、二五年以上にわたり社長・会長として銀行経営に携わった。特に、一九八九（平成元）年前後の普通銀行への転換にあたっては、陣頭指揮に立ち、新生愛知銀行の初代頭取を務める傍ら、地元経済界・金融界の活動にも熱心で数々の要職を務めた。

一九九〇年代後半、大口町は小口城址を顕彰するため、小口城址公園として整備することを決めた。その際には、脩をはじめ渡邊一族が所有する小口城址の土地について、父米次郎の意志を継ぎ、公園整備に理解と協力を示した。



3-7-25 小口城址石碑 (2022年撮影)

舟橋 金造（ふなはし きんぞう・一八九六〜一九七六年）

・高次（たかじ・一九〇二〜八六年）兄弟

「万年スタンプ台」を発明した兄弟



3-7-26 舟橋 金造

一八九六年 誕生
一九二五年 舟橋商会設立
一九四一年 シヤチハタ工業(株)設立
社長就任
一九六四年 同社 会長就任
一九七六年四月 没



3-7-27 舟橋 高次

一九〇二年 一月八日 誕生
一九二五年 舟橋商会設立
一九四一年 シヤチハタ工業(株)設立 常務
一九六四年 同社 社長就任
一九七七年 同社 会長就任
一九八六年六月 没

シヤチハタ株式会社の創業者である舟橋家は、現在の大口町秋田二丁目で、二町歩の田畑と雑木林を持つ程度程度の自作農であった。のちにシヤチハタ創業者となる金造と高次は、舟橋家の四男・五男として生まれた。金造は、小学校を卒業すると名古屋市内の洋服屋に見習いとして勤め、その後、製剤会社で配置売薬の仕事に就いた。高次も小学校卒業後、金造に誘われ同じ仕事に就いた。金造は高次に薬

の効能と包み方を教え、二人で荷物を背負い、村々を戸別訪問して歩く日々が続いた。しかし、高次は重度の神経痛を病み、転職を余儀なくされると、三兄の鈴一が独立して織物工場を始めたため、その工場を手伝うことになった。工場で働きながら夜学に通い、さまざまな仕事をしながら、夜間の商業学校に三年間通い、早稲田大学の夜学に通学した。金造は、配置売薬の仕事を辞め、名古屋を中心に様々な製品の販売を手掛けていた。その際、高次にポケットインキ瓶と蚤取り器のみの販売を持ちかけた。売薬で培った金造の営業経験は活かされ、ポケットインキ瓶が大阪の有名百貨店で販売されたが、ポケットインキには栓がないためインキが蒸発して困るなどの苦情が相次ぎ、結果として失敗を招いた。この失敗が、のちに品質にこだわる姿勢を貫き、「万年スタンプ台」を開発する教訓となった。

二人は名古屋に戻り、のちの舟橋商会につながるインキの配合を生業とした。万年スタンプ台開発のきっかけとなったのは、売薬行商時代に顧客からもらう納品時の受領印であった。当時のスタンプ台は、すぐに表面のインキが蒸発してしまつたため、使うたびにインキを瓶から補充する必要があつたが、ここに目を付けた兄弟は、いつでも使えるス

タンブ台の開発に取り組んだ。開発は原材料にこだわり、染料科学を徹底的に研究した。

一九二五（大正十四）年一月、名古屋市中区に舟橋商会を創立し、インキの補充が足りない万年スタンプ台の製造販売を開始した（3-7-28）。一九二七（昭和二年）には、万年スタンプ台の改良品で特許を取得し、一九三〇年には、名古屋城の金の鯨をデザインした「シヤチハタ印」の商標登録もされた。売上げは伸張したものの暮らしは依然厳しく、原材料の仕入れは苦労が続いた。

一九四一年九月、舟橋商会を改組してシヤチハタ工業株式会社を設立し、上海に出張所を出すなど会社経営は順調であった。アジア・太平洋戦争に突入すると、関東軍の指示で満州国に生産工場を建てたが、敗戦時にすべて水泡に帰した。また、

名古屋市内の工場・本社も爆撃に遭った。

それでも一九四五年九月には、名古屋市内



3-7-28 舟橋商会
名古屋市中区岩井通り営業所
(1936年) (『シヤチハタ八〇年誌』)

に工場を建てスタンプ台の製造を再開した。朝鮮戦争特需を経て一九五四年に工場を拡張し、ベルトコンベア二台を有する最新設備の工場により、生産力が大幅に増強された。品質の向上と製品の多角化にこだわり、特に朱肉・スタンプ台の改良、不滅インキ・筆記具の開発に力を入れた。一九六四年五月、高次は社長に就任し、社長の金造は会長となった。高次は、視野を広く持ち、国際社会に向けて優れた製品を生産し、国家社会に貢献する社是を示した。金造は経営の一切を高次にまかせ、以後、中部商工連盟会長、名古屋輸出振興会副会長など様々な役職を歴任し、中部の経済発展に貢献した。一九七六年四月、金造が亡くなると、翌年に高次が会長に就任し、長男の紳吉郎が四十歳で社長となった。高次は、若い社長を中心とした経営陣の支えとなっていたが、一九八六年六月に亡くなった。

舟橋兄弟と町のかかりとして、一九六二年九月六日、舟橋金造は大口中学校へ招かれて全校生徒に対し講演をおこなっている。また、大口南小学校が、創業家の出身小学校という縁で、一九六六年から一九九七年まで、五年生・六年生の遠足（社会見学）先としてシヤチハタ工場の見学を受け入れた。

赤堀 禅福（あかほり ぜんとう・一八九一〜一九六四年）



3-7-29 赤堀禅福

一八九一年 丹羽郡野寄村で生誕
 一八九九年 九歳で桂林寺入山
 一九二〇年 山梨県の少林寺住職
 一九四二年 桂林寺住職
 一九六四年 没

赤堀禅福は、一八九一（明治二十四）年に丹羽郡野寄村（現岩倉市野寄町）で生まれ、九歳の時に桂林寺一四世森川師に得度し、曹洞宗大本山永平寺で修行した。洋画を野崎華年（一八六二〜一九三六年）、日本画を土佐派の森村宜稲（一八七一〜一九三八年）にそれぞれ学んだ。のちに東京美術学校（現東京芸術大学）の聴講生となる。

一九二〇（大正九）年、山梨県東八代郡富士見村（現山梨県笛吹市）の少林寺住職に招かれる。一九三七（昭和十二年）、山梨県甲府市で開かれる市制五十周年記念全日本産業観光大博覧会のため、同市から依頼を受け、三方ヶ原合戦図の制作に入った。縦二二六cm・横二七mの大作であったが、戦争の激化で博覧会が中止となり、作品の制作も途中で打ち切られた。なお甲府市の市制百周年記念事業で、この絵は展示された。

一九四二年に桂林寺住職となり、丹羽郡大口村大字豊田に移り住んだ。

赤堀は、禅宗の僧侶でありながら仏画だけにとどまらず歴史・美人画・花鳥風月など流派にとられない多様な題材を描き続け、曹洞宗大本山永平寺・大本山總持寺にも作品を献納した。一九五一年、永平寺からの依頼を受け、永平寺高祖大師（道元禅師）七百年忌にあわせ、「聖徳太子尊像」を献納し（317-30）、その二年後に總持寺からの依頼を受け「後醍醐天皇御肖像」を献納している（317-31）。

一九五九年二月に永平寺より、参拝者の増加にともない永平寺の全景図を描いてほしいと依頼された。同年四月から制作をはじめ（317-32）、一九六二年七月に「永平寺全図」（317-33）が完成し、翌年十一月に額装した。作品に使われた約五m四方の和紙は、横山大観（一八六八〜一九五八年）が一九二六年に越



3-7-32 永平寺全図を描く禅福



3-7-33 永平寺全図 510×510cm (永平寺所蔵) 1963年

【作品】

前和紙の紙すき名人・初代岩野平三郎（一八七八～一九六〇年）に依頼した三三枚のうちの一枚である。赤堀は、「永平寺全図」の額装を見届けた翌一九六四年一月、七十三歳で永眠した。



3-7-31 後醍醐天皇御肖像
213×165cm (總持寺所蔵) 1953年



3-7-30 聖徳太子尊像 206×171cm
(永平寺所蔵) 1951年

前田 暉（まえだ えき・一九二一～二〇一三年）

本名 暉男（えきお）



3-7-34 前田 暉

一九二二年 大口市で生誕
一九四八年 日本美術院展 初入選
一九五一年 日本美術院賞
一九六二年 日本美術院 特待
（日本美術院招待）
二〇一三年 没

前田暉は、一九二一（大正十）年三月生まれ、大口市大字大屋敷（現大口市大御堂）で育ち、西枇杷島町（現清須市）に住んでいた。戦中から戦後にかけて大口市に疎開し、絵を教えながら作品を描いていた。日本画家小松均（一九〇二～八九年）に師事し、若くして日本美術院に出品した。一九四八（昭和二十三年）年、第三十三回日本美術院展で初入選を果たし、同年十一月三日、国民の祝日に関する法律制定後、初の文化の日にあわせ、大口市学校で「本校舎竣工祝賀展覧会、大口市出身前田画伯出品展覧会」を開催したことが同中学校の学校日誌に記載されている。

一九五一年には日本美術院賞、その後も白寿賞・奨励賞などを受賞した。前田と同じく小松均に師事し、県内で活躍する日本画家本多茂（一九一三～二〇〇五年）と一九六

九年にバリヘデッサンの旅に出るなど、意欲旺盛な活動をおこなった。

晩年は絵画制作と後進の指導に力を入れ、長く中部院展のリーダーとして歩んだ。二〇一三（平成二十五）年、九十二歳でその生涯を終えた。

前田 暉 ～その人柄～

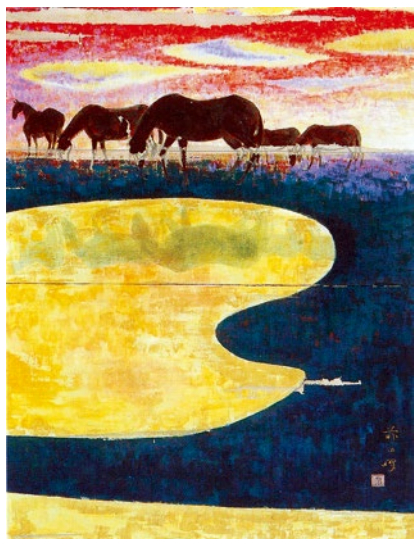
二〇〇五年に大口市歴史民俗資料館で、前田暉の個展を開催した。そのきっかけとなったのは、一九四八年に大口市内で展覧会を開催後、展示作品を購入した住民の方々からの要望を受けたためであった。

個展の開催を打診したところ、前田は当初、固辞していた。しかし、村内で開催した展覧会を懐かしむ住民がいることに感謝の念を抱き、個展の開催を承諾し、新たに作品を出品した。当時は八十三歳で、名古屋市内の文化センターで絵画教室の講師をしていたが、受講生に対して何も話さず、人づてに個展の話聞いた受講生が資料館を訪れた際に「先生が何も言っていないから、見そびれるところだった」と話していた。前田の寡黙で自立つことを嫌う人柄が偲ばれる。また、資料館には「西濃を中心に自分の鷹作が出回った時期があるので注意するように」と助言をするなど、細やかな気づかいをする一面もあった。

展覧会

作品「馬」は、暉が展覧会で初入賞する前後の作品とみられる(3-7-35)。サインも名字が入る。この作品は、資料館で個展をおこなう際、当時の大口南小学校校長室に飾られていた。記録からは、一九四八年に大口中学校でおこなわれた展覧会のみ確認できるが、当時を知る町民の話では、大口南小学校・大口北小学校でも個展を開催し、会期終了後は作品を購入して前田暉を応援したという証言もある。このことから、大口南小学校で開催したときに寄贈された作品の可能性がある。二〇二三(令和五)年現在、生まれ育った大御堂地内の集会所に所蔵されている。

【作品】



3-7-35 馬 72×56cm (絹本)
(大御堂集会所所蔵)



3-7-37 長春花 妙高原
39.5×30.5cm (紙本)
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-36 巒峯春雲 戸隠
31.5×41cm (紙本)
(大口町歴史民俗資料館所蔵)

高木 天仙・大宇（書家親子）

高木 天仙（たかぎ てんせん・一八九八〜一九八六年）

本名 鶴義（かくよし）



3-7-38 高木天仙

一八九八年 現・大口町中小口で生誕
 一九四七年 大口村議会議員に当選（〜五一）
 一九五七年 民生紡績(株)明光高等家政学校
 講師
 一九八六年 没

高木天仙は、一八九八（明治三十一年）九月五日、丹羽郡小口村（現大口町中小口）にて、農家の長男として生まれた。

小学六年生の時、近所の住民より「和尚から十円借りるため、借金の証文を代筆してくれないか」と頼まれたことがきっかけとなり、隣家の妙徳寺住職、亮堂恵隆から書の手ほどきを受けるようになった。しかし、以前より丹羽郡富成村河北（現大口町河北）在住の仙田半畊はんこうに師事し、詩書画の指導を受けていたとされる。

隣村の丹羽郡古知野村（現江南市）に住む大池晴嵐せいらん（一八九九〜一九七七年）も、親戚にあたる半畊に少年時代から師事していた。天仙と晴嵐は同学年で付き合っても長く、晴嵐から「一緒に東京に出て一旗揚げよう」と誘われたが、

天仙は厳しかった父の目を気にして一緒に上京することなく、家業の農業を営みながら書の研鑽を積む道を選び、展覧会に出品して名声を得ようとしなかった。

しかし、農村の暮らしの中では、農業改良実行組合長や養蚕組合長などを務め、一九四七（昭和二十二年）年には、大口村議会議員にもなるなど、様々な役職を歴任している。役職を務めた関係上、名古屋市内へ出張する機会が多く、その度に展覧会を観賞し自己研鑽に励んだ。自宅での書道塾、一九五七年に民成紡績株式会社が開校した明光高等家政学校の講師として書を教えるかたわら、様々な碑文の書を依頼されるようになり、徐々に書家としてその名声は高まっていった。

晩年、「この頃の書家の字は、くりくりと丸まった、おもしろい字が得意らしいが、やはり書は正座して襟を正してみるもの」と語っている。

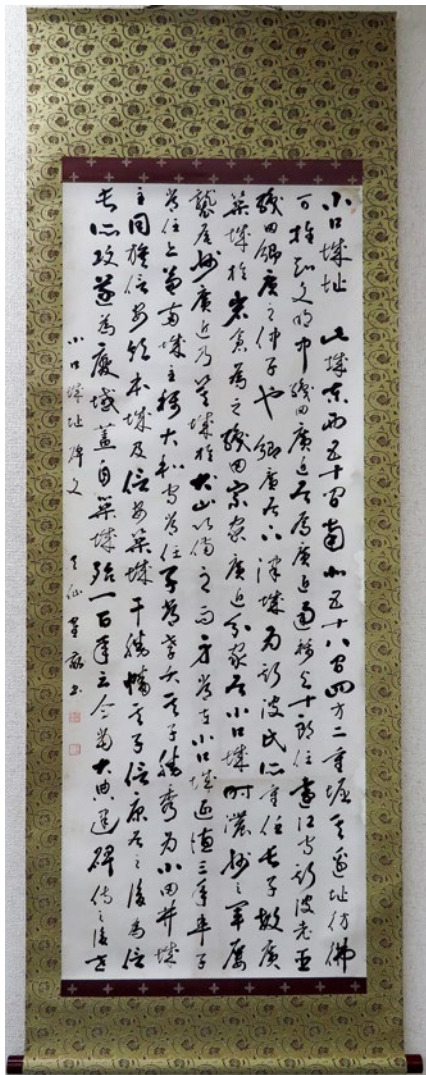
一九八六年、八十八歳でその生涯を閉じた。



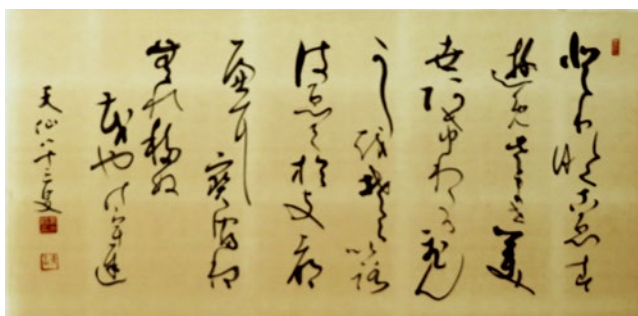
3-7-39 自ら書いた整田碑の前で写真に写る天仙



3-7-41 徳
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-40 小口城址碑文
(小口城址の裏面の由緒書きを書いたもの
(原文は仙田半耕による))
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-42 とりなくうた (大口北小学校所蔵)

碑碣

1952	野田正昇頌碑	大口町総合福祉会館
1954	水神碑（署名なし）	大口町中小口
1955	五条川改修記念碑	大口町上小口荒井
1958	土地改良完成記念碑（署名なし）	大口町余野
1959	豊三用水改修記念碑	大口町秋田
1964	ニッ屋三百五十年記念碑	大口町ニッ屋神明社
1966	堀尾金助とその母顕彰碑	大口町豊田八剱社
1968	小口神社由緒碑	大口町中小口 小口神社内
1968	整田碑	大口町秋田緑地公園内
1974	太田表忠碑	大口町豊田
1975	豊穰治之碑	大口町役場東
1977	献碑神徳碑	大口町中小口 小口神社内
1980	土地改良碑	大口町外坪
1981	整田碑	大口町新宮北外坪・中小口
1982	大口町民憲章碑	大口町役場

寺社標

1939	薬師寺（署名なし）	大口町上小口
1952	大口神社	大口町大屋敷
1966	小口神社	大口町中小口
1966	八剱社	大口町豊田

その他

1972	弘法大師巡拝碑	大口町下小口仁所野地内
1981	巡拝記念碑	大口町余野徳林寺内
1982	大口西小学校校歌碑	大口町余野
1982	津島社寄付者名（4m ステンレス焼付）	大口町秋田
1982	津島社額（木額）	大口町秋田津島社拝殿

高木 大宇（たかぎ だいう）・一九三〇～二〇一三年）

本名 健治（けんじ）



3-7-44 高木大宇

一九三〇年 現大口町中小口で生誕
一九五一年 日展初入選（以後入選三一回）
一九七三年 毎日書道展準大賞
一九九〇年 教育功労者表彰
一九九七年 愛知芸術選奨文化賞
二〇一二年 文部科学大臣賞
二〇一三年 教育文化功労者・県表彰
没

一九三〇（昭和五）年八月二十八日、大口村大字小口（現大口町中小口）にて高木鶴義（天仙）の次男として生まれる。幼少期には、父から書の指導を受け、のち大池晴嵐・青山杉雨（一九二二～九三年）に師事した。

一九五一年、二十一歳で日展初入選を果たした際は、大嶋と号していた。このとき、祝いの会で前衛書家の上田桑鳩（一八九九～一九六八年）から「新人のくせに俺よりでかい名前だな」といわれ「大宇」に改めたといわれている。本職は中学校の教員であったが、途中から書道専任の高校教諭となり、師匠の字をまねるのではなく、自由な発想で書の美しさを追求する「考える書道」を説いた。

また、大宇は、書の大衆化が急務として諸活動をする傍ら、中国の古典を幅広く研究した。訪中は三九回におよび、

北京・南京・西安において作品展を開催するなど、中国との国際交流に活躍し、書道界の発展に尽くした。

一九七一年から書道研究宇門会を立ち上げて、以降四二回の宇門展を開催し、後進の指導と育成に尽力した。のちに大学の教授として、教育の場を広げていった。

二〇一三（平成二十五）年十二月、八十三歳でその生涯を閉じた。

大宇は、父・天仙と同じく依頼を受けた整田碑や公園名など多くの石碑が町内に残っている。

また、一九九九年に大口町歴史民俗資料館で、天仙・大宇の展覧会が開催された際、大宇は多くの作品を寄贈した。

【作品】



3-7-45 桃源郷
170×66.5cm
（大口町歴史民俗資料館所蔵）

【作品】



3-7-47 群仙長寿
140×34.5cm
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-46 福祿寿 34×68cm
(大口町歴史民俗資料館所蔵)



3-7-49 雅宴舞会 (堀尾跡公園内)



3-7-48 大口町文化財収蔵庫 196×45.5cm
(看板作成のために揮毫した作品)
(大口町歴史民俗資料館所蔵)